

圭佑

ヒロシ

## 煙草は20歳になってから

---

「俺の伝説はこれから始まる」

そう言っていた兄が死んだ。

いつもと同じ朝だった。

母が作った朝食を食べ終えた兄は、寝起きの僕に

「今日も全力で燃え尽きてくるぜ。グッドラック！」

と湯飲み茶碗をテーブルに置いて家を出た。その言葉を聞いたのは僕だけで、そしてその言葉を最後に死んだ。家から500mしか離れていない場所で交通事故に巻き込まれた。即死だった。

その日は日曜日で、公務員である僕と父はゆっくりとした休日を過ごすはずだった。

電話で知らせを受けた母は、まだ寝ていた父を起こしに行き、僕はすぐに家を飛び出し現場へ走った。大型トレーラーが道を塞ぐように横に倒れており、大きな車体が兄の胸から下を潰していた。兄は目を開け空を見つめていた。近くにいた人たちが車体を持ち上げようとしていたが兄を引きずり出すほど持ち上げることはできなかった。後から駆けつけた父も加わったが結局動かず、母はただ泣き崩れていた。僕はその光景を何もせずに眺めていた。

あまりの呆気無い兄の死に実感が湧かず、しばらくの間は朝の食卓や台所に兄の影を感じることもあり、玄関はたった一足減っただけなのに殺風景に見えた。

兄は真面目な人間であったが、真面目に不真面目なこともした。

18歳で煙草を吸い始め部屋でプカプカと吸っていた。父に見つかり怒られていたがやめなかった。兄の部屋を覗くと中央のテーブルに置かれた灰皿に、煙草の吸い殻が丁寧に積み上げられており、20cm程の円錐になっていた。その頂点が定まると兄は携帯電話で写真を撮り「また1つ芸術が生まれた。我が部屋にピラミッドが！」とメールを僕に送ってきた。最初は「凄い！」や「さすが！」などと返信していたが、5回目を越えるといちいち反応するのが面倒になり返信をしなくなった。それでも兄は定期的にピラミッドを送り続けた。初めの頃は2ヶ月に1度くらいのペースで送られてきたピラミッドだったが徐々に完成のスピードが早くなり、やがて週に1度のペースになった。

兄の20歳の誕生日。家族で盛大な誕生日パーティを開いた。

兄は自分で立てた20本のロウソクに火をつけて、シャンパンが入ったグラスに片手に持ち立ち上がった。

「20歳になりました。これを期に俺は煙草をやめます。だが酒を始めます」

と声高らかに宣言し、ロウソクの火を吹き消してシャンパンを一気に飲み干した。その日は父と一緒に飲んでいて兄だが、その姿や飲むペース、水割りを作る動きなどに全く違和感がなく、明らかに以前より酒を飲んでいて人間の動きだった。後日、兄にこの事を問いただすと「記憶にございません」と一言だけ返答された。

その日から兄は「堂々と飲めるって素晴らしい」と毎晩のように酒を飲んだ。

煙草は本当にキッパリとやめたらしく、いつも兄に纏わりついていた煙草の匂いも無くなり、

ピラミッドの写真も送られてこなくなった。それは何となく寂しくもあり、僕の中にある兄の象徴の一部が消えてしまったように感じた。その穴を埋めたかったのか、いつしか煙草を始めた高校生の僕は兄のようにピラミッドを作り始めていた。しかしどうしても兄のようには積みなかった。兄のピラミッドは頂点から底辺にかけてできている凹凸が均等で何年も前からそこにあるかのように落ち着いていた。僕のピラミッドはしっかりと丁寧に作っているはずなのにどこか危なげで、少しの衝撃を与えただけで脆くも崩れてしまった。

兄の作品を何度も見ては試行錯誤を繰り返し、ついに若干不安定ながらも15cmほどのピラミッドが出来た。嬉しくなった僕は携帯電話で写真を撮り「15cm達成！」と兄に送った。その2分後、兄は僕の部屋のドアをノックもせず思いっきり開けズンズンと近づいてきたかと思うと、ニヤけていた僕の頬を無言で思いっきり叩いた。突然の出来事にポカンとしていると胸ぐらを掴まれ

「未成年は煙草を吸うな」

と表情を変えずに言い、煙草と灰皿を持って行った。不安定だったピラミッドはすぐに崩れ、吸い殻が2、3本床に落ちた。頬についた掌の跡は夕飯時になっても消えず、両親に「どうした？」と聞かれたが煙草を吸っていたのがバレると面倒なので答えなかった。

夕飯を食べ終え部屋に戻った僕はベッドに横になった。毎日夕食後に部屋で煙草を吸っていたので口が寂しかった。仕方なく通学鞆に入っていたガムを噛んでテレビを観ていると、その日も晩酌を始めた兄がドアを叩き「一緒に一杯どうよ」と誘ってきた。兄なりの慰めだったのかもしれないが、僕は「いえ、未成年ですから」と断った。するとドアが少しだけ開いた。

「差し入れだ」

低い位置からスッと出されたのは煙草の箱と灰皿で、兄の手はすぐに引っ込んだ。僕はベッドから起き上がり煙草の箱を開けたが、中には禁煙パイポがぎっしりと入っていた。ガッカリしていると再びドアが少し開いた。

「忘れてた」

乱暴に投げ込まれたのはライターだった。

## 残されたトレーニング器

---

兄は社会人になってから毎日トレーニングを欠かさなかった。自分の部屋に置いた様々なトレーニング器具で毎朝最低1時間は筋トレをしていた。朝にたっぴりと汗をかいてシャワーを浴びて朝食を食べて出勤。それが兄のルーティンワークだった。とてもストイックで妥協を許さない人間だった。

居間にはエアロバイクを置き、一日のノルマを決めていた。新聞や本を読んでいる時、テレビを観ている時など脚が自由であればエアロバイクに跨りノルマを達成するまで汗を流していた。手が空けばストレッチをして柔軟性を高め、栄養学を自主的に学んで食事に気をつけていた。

健康管理に厳しいのかと思えばそうでもなく、毎晩酒を浴びるように飲み、友人に誘われると必ず飲みに出掛け、必ず酔い潰れた。そんな日は深夜に友人に抱えられて帰宅しそのまま部屋の隅に敷かれた布団に転がり「ごめんちゃい」と決まり文句のように呟いた。それでも、どんなに酔いつぶれても次の日はいつも通りに起床し、トレーニングをしていた。

「体の水分を入れ替えるのがポイントだ」

汗塗れになりながら懸垂をしていた。

「生涯、筋トレと酒はやめられない」

が兄の口癖だった。

トレーニング用品が沢山置かれた兄の部屋には、大きな本棚があった。読書が好きだった兄は休みの度に図書館へ行きどっさり本を借りてきて、気に入った小説は書店で購入して本棚に並べた。純文学、時代小説、恋愛小説、ミステリー、ファンタジー、エンターテインメント、有名な著者から無名な著者まで、兄が読む本はジャンルも著者も問わなかった。読んだ本の書評をブログに綴るため、兄が読んでいる本は付箋だらけだった。年に150記事程更新されたブログはそれなりにアクセス数があった。時々「これ読んでみな」と本を渡されたがどれも面白く、そういった本は殆どが後に映画化やドラマ化されメディアで話題になった。

兄は物語中に何かわからないことがあればすぐに調べ、その中に気になったエピソードがあればそれも調べ、そのエピソードに登場する人物や事件なども細かく調べた。そうして得た知識はとても豊富で兄はクイズ番組が得意だった。

「江戸時代の湯屋にある柘榴口ってなんで柘榴口って言うか知ってる？」

以前僕は歴史の授業で先生が小ネタとして教えてくれたのを得意気に尋ねてみたことがる。

「ん、鏡だ」

兄は読んでいた本から一瞬だけ僕に顔を向け即答した。それは答えの柱となる単語だった。僕は敗北感を覚えたが兄は勝ち誇った様子もなく再び本を読み始めた。

こんなこともあった。その日、エアロバイクを漕ぎ終えた兄はソファに寝そべて本を読んでいた。「兄ちゃん」と声をかけるが本に夢中になっているのか「ん」と反応するだけだった。僕は数学の授業で配られたプリントを渡し「この問題わかる？」と指差した。それは「明智君からの出題」という問題で、先生が遊び心で出題したものだ。点数には関係なく、時間が余った

人用に作られたものだ。兄は顔を上げるとプリントを手に取り眺めた。

「ここに同じ重さの玉が7つあります。ここに少しだけ重い玉を1つ加え8つにして掻き混ぜました。さて、天秤を使って違う重さの玉を判別するには最低何回使えばいいでしょう。（注意）形や大きさは全て同じで、手に持ってみても判断できません。」

兄は静かに目を閉じて考え始めた。これはそう簡単には答えられないだろうと思った。僕はこの問題に30分程悩み導き出した答えは間違いだった。解答と解説を読んでようやく納得できたのだ。

「2回」

「え？」

「2回だな」

当てずっぽうで答えている可能性があったので「どうやるの？」尋ねた。

「まず手元に2つの玉を残して...」

そこで僕は「参りました」と言った。

なぜそんなに早く答えが閃くのか。尋ねると兄は

「問題を横から縦にして斜め下から見るのがコツだな」

とよくわからない返答をした。

解けないクイズは無いのではないかと思うほど頭のキレを見せる兄だったが、地理には滅法弱く「能登半島ってどこの島？」などと聞かれたときがあった。僕は驚いて能登半島についての説明をすると「俺は常に世界を見ているからな。こんな小さな島国のことなんてわからん」と言い訳をしていた。

「世界を見ていた兄」の部屋には確かに大きな世界地図が貼ってあった。兄が小学一年生になった時に買ってもらった机に付いていた物らしい。外国を舞台にした小説を読む時は世界地図が役に立つと言っていた。

その地図には兄の頭のキレを証明するような話の一つある。これは父から聞いた話だ。

父が机を組み立てていると兄は箱の中から世界地図を見つけ、早速壁に貼ってしばらく見つめていた。机が完成する頃になっても地図を見つめたままなので「余程世界地図が気に入ったんだな」と父は思った。しかしどうやら違うようだ。兄は地図を見ながら「んー」としきりに首を傾げている。その様子を見て「どうした？」と父は尋ねた。「ねえお父さん。地球は丸いよね。丸いのをどうやってペタンコな一枚の紙にしたんだろう。丸いのを広げたらモコってなるんじゃない？んー、うまく言えないや。こんな風にさ」と両手で丸い形を作りながら説明をしたという。父はその発想力に非常に驚き、兄の頭を撫でながら地図の書き方には色んな種類があることを教えた。そして兄が貼った地図は「無理矢理広げて破れた箇所を伸ばして無理矢理くっつけた書き方」と言ったのだが、兄はそれを聞き再び地図をジーっと見つめたかと思うと「無理矢理伸ばしたら大きさが変わっちゃうじゃん。この地図は変だ」と言った。父は笑いながら「破れた部分をそのままにした地図もある」と教えたが兄は「そんな地図は見辛いじゃん」と文句を言い、それ以来雑誌などで同じような世界地図を見るたびに「この地図は正確じゃない」と言うようになった。兄は中学になった時、壁に張ったのがメルカトル図法で書かれたもので、父が言って

いた「破れたままの地図」がグード図法であることを知った。

この話を聞いたのは僕が中学生になって試験勉強をしている時だった。茶の間で地理の教科書とノートを広げているとそれを眺めていた父が思い出したように言ったのだ。僕は初めて世界地図を見た時のことなど覚えていないが、特に疑問は抱かなかっただろう。「これが世界か。日本は小さいな」くらいしか思わなかったはずだ。

兄は成績が優秀で小学生の頃のテストは90点以下は取ったことがないという。その成績は中学になっても変わらず、3年生になると生徒会長になった。兄が卒業したその年に僕が中学に入学すると「弟さんか。あいつは頭が良かったな。お前も頑張るんだぞ」などと何人かの先生に言われた。僕はそれがプレッシャーであったが、先生も両親も兄と僕を顕著に比較することはなかった。そのお陰で僕は僕なりの学生生活を満喫することができた。

兄が通っていた高校は華やいだ街の進学校で、この家から電車で片道1時間半かかった。アパート暮らしが寮生活という選択もあったが兄はこの家から通い続けた。兄は電車に乗っている時間である往復3時間を勉強に使い、その高校でもトップクラスの成績を残した。「電車が一番集中できる」と言っていた兄は家で勉強することはなかった。

高校3年生になると教員になるために大学を目指し、さすがに通学時間だけでは足りなかったのか家でも勉強している姿があった。そして第一志望の大学を合格し進学した。

大学はそれまで通っていた高校の近くにあったため、進学後も家から通った。時々友達の家泊まることもあり、1週間程帰らないこともあった。

3年生の夏に帰省した時「俺は大学を辞める」と両親に言った。賑やかな夕飯を楽しんでいる時だった。

当然両親は「何事か」と問いただしたが、兄は「俺は教員には向いていない。一刻も早く働きたい」としか言わず、「兄の考えなら」と両親は渋々承諾した。

兄はすぐに就職活動を始め、ハローワークから色んな求人情報をコピーして見比べていた。そのどれもが建築作業員の求人だった。

ある建築会社にハローワークを通して面接を申し込んだ数日後、「全力で面接に挑んでくる」と家を出た兄はその2時間後に坊主頭で帰宅した。

「事務所に面接行ったら『大学中退した人がちゃんと働けるか心配だ』って言われたんだよ。だからさ、『ちょっと時間ください』って事務所出てさ、近くの床屋に行って坊主頭にしてもらって事務所に戻って『お願いします』って言ったのよ。社長さんに笑われたわ」

兄は頭をジョリジョリと擦った。

そんな兄の気迫は無事認められ、翌月から働き始めた。

兄は既に支払った大学の入学金や授業料、アパートの家賃を全て返すまで給料をそのまま両親に渡し、その中から月3万円の小遣いをもらっていた。そして約1年後に返済は終わった。

朝のトレーニングに加え、肉体労働をしていた兄の体は引き締まっていた。時々作業が楽だった日などは帰宅後、「今日は不完全燃焼だ」と庭に備え付けた自作のトレーニング器で汗を流していた。トレーニング器は足場用鉄パイプを組み合わせて作られており、材料は作業現場から余ったものを社員割で買ってきたい。兄が作ったトレーニング器は懸垂、腕立て、プッシュア

ップなど様々なトレーニングができた。

兄が死んで数ヶ月後、使用されることがなくなったトレーニング器は父が撤去した。

兄の本棚の片隅に厚めのキャンパスノートが置かれていた。汚れた表紙には「俺のメモ」と油性ペンで大きく描かれている。兄がいつも本と一緒に持ち歩いていた物だ。表紙を開くと文字の羅列があった。名言らしき言葉と書籍名、その言葉が書かれているページ数がキッチリと記録されていた。小説だけではなく自己啓発本やビジネス本などの書名もあった。そういった類の本を読むとき兄は書かれていることを全て鵜呑みにせず、しっかりと自分が納得できることだけを吸収していった。

「要は信念をいかに持ち、いかに実行し、いかに貫くかだ。」

どこまでも自分に厳しく、一度決めたことは最後までやり通す兄だった。時に、傍から見ればどうでもいいような小さな事でも本気で挑んだ。あの日もそうだった。

「無理じゃない？」

と諦め顔の僕に

「できるって。死ぬ気でやれば絶対できる。死ぬ気でやるってのはどういうことかわかるか。これをやらなかったら俺は死ぬんだぞ。やるか死ぬかのどっちかしかないんだぞ。」

兄はテーブルに置かれた2つの生卵を指差した。

その日、兄は「これを重ねて立ててみせる」と3時間チャレンジしていたのだ。それから2時間が経ちようやく兄は諦めた。結果として重ねて立てることはできなかったが、並べて2つ立てることはできた。

「この卵、よく頑張ったな。殿堂入りだ。」

兄は卵を「よしよし」と撫でた。

その卵は夕飯のすき焼きで使われた。

キャンパスノートをペラペラと眺めていると「筋トレ、ストレッチは一生！」と大きい文字で書かれているページがあった。

「歳を取るほど体は硬くなっていくからストレッチは年々増やさないといけない。こればかりは終わりが無いな。」

開脚ストレッチをしながらゲームのコントローラーを操作していた兄の姿が頭に浮かんだ。兄にとってゲームとストレッチはワンセットのようなものだった。

「ゲームが面白ければ沢山ストレッチができる。一石二鳥だ。」

そんな兄は普通にゲームをするだけでは物足りなく、あえて「壁」をつくっていた。弱い主人公が仲間を集めながら強く成長し世界を悪に染めようとする強大なボスに挑む物語を、「RPGの常識をぶっ潰す」と言って主人公一人で立ち向かっていた。コントローラーを逆に持ちシューティングゲームに挑んでいた。全国最速ラップ同等の記録をレースゲームで叩きだしていた。「右手一本でこいつを黙らせる」と弱パンチとジャンプだけで格闘ゲームをやっていた。「覚えれば簡単だ」とリズムゲームのハードモードを目を閉じてプレイし高得点を出していた。

ラックに置かれたソフト一つ一つに兄の小さな伝説が刻まれていた。

「こんなゲーム持ってたんだ」とラックから取り出そうとした時、携帯電話が鳴った。母か



らだった。

「ケータイってメーカー変えると電話番号も変わるの？」

「メーカーっていうかキャリアね。でも今は番号そのままできるよ」

「今買い物してたら可愛いケータイあったのね。私のケータイ、バッテリー寿命でしょ？だから変えようかと思うんだけど」

「うん、変えても良いんじゃない」

「わかった」

母が長年使用している携帯電話はバッテリーが一日も持たないほど弱っていた。僕の携帯電話もそろそろ変え時だ。

僕が初めて携帯電話を持ったのは高校に入学した時だった。契約をするために父とショップへ行き、帰宅してから説明書を読みながら操作していると「お、買ったのか」と兄が後ろから覗き込んできた。

「どれ登録しなきゃな」

兄は「ふふん」と鼻を鳴らし携帯電話を取り出した。僕は自分の番号をまだ覚えて無かったのでディスプレイに表示させようとした。すると兄は手で遮った。

「よし、お前の番号を当ててみせよう」

僕はディスプレイを隠して「どうぞ」と促した。

「090で、んー、、、まず6。どう？」

「うん」

兄は目を閉じて眉間に皺を寄せた。

「じゃあ次は、、、また6だな」

「うん」

「で、3」

「うん」

「おい真面目にやれよ」

兄は不満げな顔をした。

「真面目にやってるよ。凄い、当たってる」

僕は「うん」としか返していなかったが、内心では「どこかに番号の控えあったのか」と驚いていた。そして兄は次の数字も当て、5つ目でようやく間違えた。4つの数字を当てたということは単純に考えれば9999分の1を当てたのだ。驚いた兄は「俺、もうすぐ死ぬとかないよね」と気持ち悪がっていた。

記憶に鮮明に残っている兄の奇蹟はもう一つある。二人でトランプで遊んでいた時のことだ。

ポーカーや神経衰弱などありきたりな遊びを何度もやって飽きてきた頃、兄が「手品をします」とトランプを僕に渡しシャッフルさせた。

「その中から好きなカードを一枚引いて覚えてください」

適当な物を引き絵柄を見た。ハートの4だった。

「では、そのカードを戻して好きなだけシャッフルしてください」

シャッシャッシャッと3、4回程繰り返して、「では」と差し出された手にトランプの束を置いた。兄は52枚のトランプを両手で広げ「んー」と唸り一枚引きぬいた。

「あなたの選んだカードはこれですね」

兄が見せたカードはハートの4だった。

「うん」

僕は頷いた。

「え？」

「うん」

「当たり？」

「当たり。え、どうやったの？」

兄は少し沈黙した後、「種も仕掛けもありません」と笑った。僕の知る限り、後にも先にもその手品を披露したのはその一度だけだった。

今思えば9999分の1を当てる兄ならば、52分の1など容易いものだったのかもしれない。

ところが兄はじゃんけんには滅法弱く、13連敗したことがある。

それらも含めて、兄の小さな伝説だった。

## メガネと時計と兄

---

先日オープンしたショッピングモールに行くことになった。

父が運転するというので僕は助手席へ、母は後部座席へ乗った。目的地までの大雑把な道は分かるが、詳細までは誰も分からない。この車にはナビがついていないので近くになったら僕の携帯電話の地図アプリを使うことにした。

兄はこの車を大切に使っていた。「長く探していた」らしい1980年製のSUVを高校を卒業したばかりの兄は親に頼み込んで買ってもらった。購入した時はとにかく故障が多く、その度に兄は時間をかけて直していた。「こうやってトラブル起こしたりしてなんかヤンチャなところがまた良いんだよな」とエンジンルームを覗きこんでいた。購入して5年ほど経った頃、ボディの至る所に錆が目立ち始めた。両親は「買い換えた方が良い」と提案したが兄は拒み、貯金を叩いて板金屋に直してもらった。「古い車でも一通り直せばまだまだ乗れるさ。ボディを直せば新車並だよ」と笑っていた兄の言うように、それ以降故障の頻度がめっきり少なくなり何の問題も無く使えるようになった。兄が死んだ後この車をどうするか両親は悩んでいたが、父が乗ることになりそれまで乗っていたセダンを手放した。エンジンルームには兄が施工した跡が多く残っており、僕は時々それを眺めるためにボンネットを開けることがあった。丁寧に纏められたケーブルや磨かれたエンジンは全く古さを感じさせず、いつしか僕も定期的にメンテナンスをするようになっていた。

「次の交差点を右ね」

目的地が近づき携帯電話の地図を見ながら指を挿した。

兄は「右」と「左」が咄嗟に言えない人だった。話をの途中で「左」を意味する動作をしながら「その右にさ」と言ったり、道案内を頼むと交差点で「ええと...こっち、ひだ...右！」と必死で右を指さした。

「なんでだろうなあ。ライトとレフトならすぐに判断できるんだよ。右と左だと本当にわからなくなる」

と兄自身も不思議がっていた。

「右手挙げてくださーい。お箸を持つ方の手でーす」

と幼稚園の先生に言われたのが原因かもしれないと言っていた。兄は左利きだったのだ。

交差点を曲がり信号を2つ進んだとき、所々にブルーシートが掛けられている建物が目に入った。外周に足場が組まれ、ヘルメットを被った作業員が重そうな材料を運んでいた。横付けされた重機には兄が働いていた会社名が記されていた。思わず兄の姿を探してしまいそうになったがその風景は一瞬で窓を過ぎ去り、いつもと変わらない寂れた町並みへと戻った。父は無言だった。

駐車場の空いているスペースを探していると雲行きが怪しくなりパラパラと小雨が降り始めた。そういえば天気予報でそんな事を言っていたような気がする。もしここに兄がいたら「的中」と表情を変えずにポツリと言っていただろう。

兄が大学へ進学した年、ゴールデンウィークで長い休みになったので一家でどこかへ遊びに行こうという話になった。

天気予報を見ながら天気が良い日を選び予定を組んで出かけた。しかし天気予報が大きく外れ、兄が楽しみにしていた遊園地は半分も遊べなかった。高校生の僕は遊園地なんて別にどうでも良かったが、兄は非常に怒っていた。「死ぬほどジェットコースター乗りたかった」らしい。天気予報に腹を立てた兄は「気象予報士になって自分で予報する」と言い、帰り道で書店に寄った。目に入った気象予報士に関する参考書や用語集、問題集をどっさり買い、車の運転を父に任せ後部座席で参考書を読み始めた。帰宅後は部屋にこもり夜遅くまで出てこなかった。新たな目標を立てた兄はいつも参考書を片手にしており「予想以上に高い壁かもしれない」と少しでも時間があれば開いていた。

その年が開け梅が咲き始めた3月、兄は合格した。

それからはキッチンに掛けられていた大きなカレンダーに天気予報が書き込まれるようになった。兄は毎週日曜日に一週間分の予報を書き込み、水曜日頃になると週末の予報を訂正したりしていた。そして当たった日には○、外れた日には△を入れた。この地域周辺だけをピンポイントに絞った兄の天気予報は数ある地域番組のどんな天気予報よりも正確だった。その週間天気予報は兄が死んだ翌日の土曜日で終わった。兄の葬儀の日、朝から昼にかけて小雨が降り続いた。兄の予報通りだった。

ショッピングモール内で僕は両親とは離れてブラブラとテナントを見て歩いた。僕はいつも兄についていくように歩いていた。兄が立ち止まれば僕も立ち止まり、兄が見上げれば僕も見上げ、兄が座れば僕も座った。

賑やかなゲームコーナーを通り過ぎるとメガネ屋があった。白を基調とした店内は明るく、父と同じくらいの年齢の人が店員と話をしている。視線をずらすとショーウィンドーがあり、時計が並べられていた。

「メガネと時計って何か関係あるのか」

兄の声が浮かんできた。バラエティ番組の合間のCMを見ていた時のことだった。

「メガネ屋さんで時計も売っている確率って高いよね。なんでだろう」

兄は早速ノートパソコンを開きインターネットで調べ始めた。「ふうん」「ほほう」などと呟き「わかった」と言った時はバラエティ番組は終わり、夜のニュースが流れていた。兄が出した結論は「昔の名残」というもので、結局なぜメガネと時計が一緒だったのかはわからなかった。

そんな兄は懐中時計が好きだった。と言っても蒐集していたわけではなく、祖父の形見である懐中時計を持ち歩いていた。アンティーク店などに寄った際、余程気に入った物があれば購入していたが使用するのは祖父の懐中時計だった。それは決して高価なものではなく、どちらかといえば安物の分類に入る物だった。一日に一回はネジを巻かないと止まってしまい、二日に一分遅れた。時間に厳しい兄は、毎日時報を聞きながら合わせていた。「俺はじいちゃんの生まれ変わりだからな」と懐中時計を磨いていやが祖父が死んだのは兄が3歳の時で、僕が生まれる前年だった。だからどちらかといえば僕が生まれ変わりのはずだったが兄はその座を頑なに譲らなかった。

その懐中時計は兄が死んだ時間でピタリと止まっていた。